

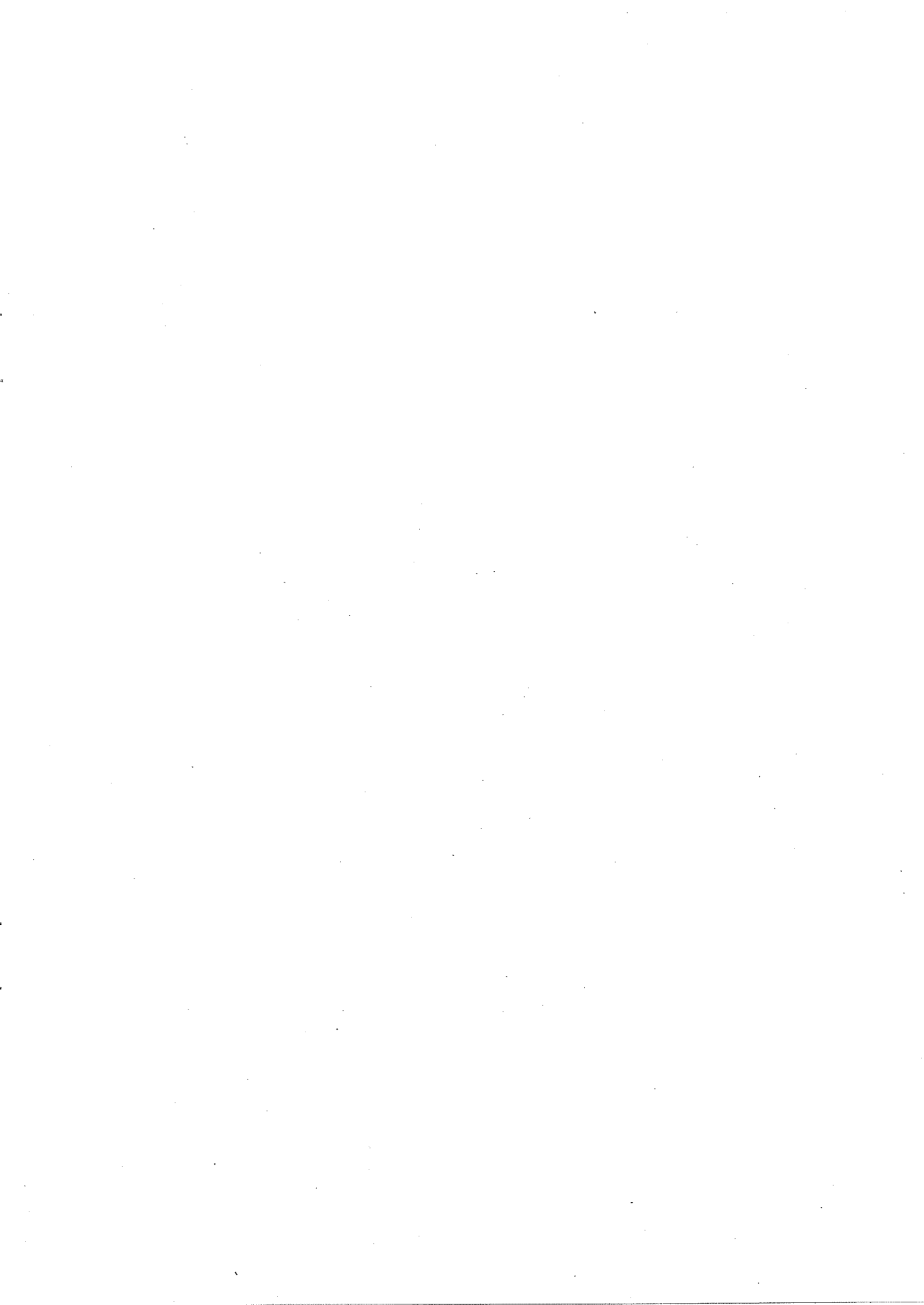
れ

国 語 問 題

(解答番号 1～27)

はじめに裏返して、表紙の注意事項を必ず読みなさい。

1. 「国語」の問題は19ページある。
2. 「数学Ⅲ」の問題は反対の面にある。



(一) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「近代」的な「蝸集空間」に生成する「イメージ」とは、いったいどのようなものだろうか。

「蝸集空間」を基礎づけている「イメージ」の特質は、それを発信する者、それを中継する者、それを受信する者、それを變形したり増幅したり減衰させたりして再発信する者、肯定や否定や好意や悪意の反射によってそれに応答する者、応答にとどまらずそれを受けて具体的な行動に移る者、逆にそれを無視して何もしない者、等々、要するに、何らかの形でそれに関係する者のいつさいを、「群衆」として成立させるといふ機能に尽きている。あなたには名前がない、なぜならあなたは「群衆」の一人だからだ、というのがその「イメージ」が運搬する究極の、どうかつまるところはその唯一の、メッセージである。

a、そこにおいて、まず率先して名前を失うものは「イメージ」の創造者や発信者にほかならぬ以上、先ほどわれわれがアンソール、ピカソ、ウォーホールといった「芸術家」たちの「名前」を並べてしまったのは、¹やや撞着した振舞いだつたと言えないこともない。われわれは単に、これらの人々の作品に現われているヴィジョンが「蝸集空間」の「イメージ」をイメージするうえで役に立つといった程度の意味合いで言及したにすぎないのだが、しかし、これらの作品がそうした種類の「メタイメージ」を提示していると見えるのは恐らく決して偶然のことではなく、そこに、こうしたかたちで「イメージ」の「近代」性を引き受けようとする実存的な決断が貫徹しているからなのではない。ただ、だからと言ってその「実存」の重さを「芸術家」の固有名詞の方に引きつけて「イメージ」を読んでもしまうと、事態はまたふたたび「一八八〇年代」以前の「芸術」の時代^①サク誤性^②によって汚染されてしまうこととなる。

b、われわれは決してウォーホールとかピカソといった名前を特権視することなく、ただ「蝸集空間」の現在に対するこうした過敏な意識の在り様を、一つの示唆的な症候例として観察するにとどめるべきなのだ。ウォーホールの提示する交通事故やエンパイア・ステート・ビルディングの「イメージ」は、名前を持った個人を輝かせる勲として受けとめられるべきではない。作者の概念さえも稀薄にしようという点にその「イメージ」としての真の刺激があるのであり、そうした刺激を作り出すために必要とされるのは、「芸術家」としての才能や靈感ではなく、仮面をつけて「蝸集空間」に

紛れこむためのテクネーであることを、ウォーホール自身はよく心得ていたのである。

今日、「映像時代」とか「映像文化」といったキャッチフレーズのもとに語られる「イメージ」の専制という現象が、「蝟集空間」に固有の「表象の政治」の問題であることは明らかだ。「近代」的なメディア社会に住むわれわれが日常的に身をさらしているのは、われわれを「群衆」の一人として定義することによってわれわれから名前を奪うような種類の「イメージ」の氾濫^②なのである。たとえば、テレビ画面に向かい合ってスポーツの試合を観戦するといった「映像」体験は、むしろ「一八八〇年代」以前には考えられなかったもののだが、そこで起きている事態の眼目は、単に、或る場所の現実の透明な表象が、そこから遠く離れた場所に身を置く者の瞳にほぼ同時に送り届けられるようになったこと、すなわち「イメージ」の搬送技術の奇蹟的な達成というだけのことには尽きるものではない。もちろん、距離の無化、そして、そこから帰結する空間概念の変質が重要であることは間違いない。ただしそれは、単に遠いものが近くで見られるようになったというだけの物理的達成ではなく、そこで見られる「イメージ」の質にも、そこで見ている主体の意識の質にも、ともども根本的な変容を迫る出来事として捉えられるべき出来事なのである。

この出来事の生成過程の通史的な年譜を辿り返す作業は、本書の主題ではない。さしあたって、「イメージ」の搬送と伝播は、「一八八〇年代」にすでにかなりのキ模^③で実現されていたという一点を指摘しておけば、それで十分だろう。

まさに建設途中のエッフェル塔の図像が絵入り新聞に掲載され、それが大部分でフランスの地方に流布され、また他の西欧諸国にまで伝播するといった現象がそれに当たる。² 距離を無化する「イメージ」の体験が、フランスの首都パリから遠く離れたところに身を置く人々のうちに、万国博覧会を見物して三百メートルの塔に昇りたいという欲望をかきたてていたのである。

1 の関係を虚構化するこうした「イメージ」体験は、構造的にはほぼ同型のまま一世紀後の今日まで生き延びている。

地球の裏側で起こっている事件を中継する衛星放送の視聴者——サッカーのワールド・カップを映し出すブラウン管に見入って、深夜、孤独に熱狂している世界中のスポーツ・ファンたち——が、「一八八〇年代」の絵入り新聞の読者の一世紀後の姿なのであり、そこでの進化の過程は、量的な拡大と速度の増大こそあれ、ひと続きの直線的なものと言っていないだろう。

今日のエレクトロニクス技術によって達成されたコミュニケーションの「同時性」や「遍在性」が

2

のものであると

いう点を強調する考え方もありえようが、われわれとしては、そうしたすべての祖型はすでに「一八八〇年代」の西欧に出揃っているという視点に立ちたいと思う。むしろ、映像メディアの進化は、たとえそれが基本的にはいかに直線的な道程であるとはいえ、「イメージ」と人間の関わりをそのつど多様な発現形態のもとに組織しており、ここ百年ほどのそうした流れを微細に跡づける作業は、それだけで優に一冊の厚い書物が必要とするだろう。だが、ここでのわれわれの意図はそうした歴史的叙述にはない。そうした「イメージ」現象の総体を一括りにして「一八八〇年代」以後の「蝸集空間」の生成と見なし、その構造的・形式的特徴と見なされるものを、いささか粗雑の弊に陥るのめかえりみずとにかく記述してしまおうというのが、ここでのわれわれの企図なのだ。では、その特徴とはいったいどのようなものなのだろうか。とりあえずそれを、「等距離性」と「再現性」という二点に要約してみたい。

「等距離性」とは、先にも触れたように、1 の弁証法の消滅という事態を指している。「イメージ」は、遠くにあるものを近づける。現実の距離は無化され、遠いものも近いものもすべて同水準ののっぺりした平面の上に並ぶこととなるだろう。d、「再現性」とは、唯一性と一回性の消滅のことであり、複製技術による際限のないコピーの増殖を通じて^{オジナル} 独自のなる起源^{オリジン}という概念そのものが稀薄化してゆく事態を指している。ここにおいては、距離の差異ばかりか価値のヒエラルキーも崩カイし、遠いものと近いもの同様、高いものも低いものもまた同じ平面に並ぶこととなる。④「等距離性」に対応するよくなかたちで、「等価値」が出現すると言ってもよい。決勝点をあげたサッカーのシュートは、現実にはただ一度しか起こらなかった出来事なのだが、テレビ画面で繰り返し再生されるその映像は、きりのない再現によってその価値を磨耗させ、平準化されてゆく——つまりはかけがえのない貴重なものではなくなってゆくので、視聴者たるわれわれは、本来人生においてたった一回かぎりしか起こらないその瞬間をつい見逃しても、いつでも同じものを見ることができると高を括ることになる。³再現可能性は人を上の空にするのだ。そして、実際、映像テクノロジーは、こうした意味での「同じものの再現」を、ますます容易にし、また精度の高いものとしつつある。コンピュータ・グラフィックスは、マシン語で書かれた同じプログラムを実行すれば、まったく同一の「イメージ」を一点一画のずれもなく狂いもなくいくらかでも再現でき、そこには、フィルムや磁気テープの場合には起こりえよ

う転写や再生による物質的な劣化やノイズの発生といったものは、いっさい紛れこむ余地がない。「近代」的な「イメージ」の「再現性」は、時代の流れとともにいよいよ過激化の一途を辿っていると云わねばならぬ。かくして、空間における「等距離性」と時間における「再現性」が、「蝸集空間」を定義することになるのである。

「等距離性」と「再現性」とが交叉する地点を、豊かなコンテキストで振動しているたった一つの美しい譬喩^{ひゆ}で指し示してみせたのが、ヴァルター・ベンヤミンであることは周知の通りだ。彼は、一九三六年の画期的な論考で、「複製技術の時代における芸術作品」の運命について語りつつ、それが宿命的に喪失してゆかざるをえないもの、すなわち、踏破しがたい絶対的な距離の彼方で一回かぎり起こる現象が身に帯びている輝かしい聖性とでもいったものに触れて、それに「アウラ」の名を与えているのだ。⁵「アウラの消滅」の後、それに取って代わって出現するものが「等距離性」と「再現性」なのである。

(松浦寿輝『平面論』による)

問一 傍線①③④のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を用いるもの、また②の漢字の読みとして最も適切なものを、それぞれの群から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は①が 1、②が 2、③が 3、④が 4。ただし、正答が複数ある場合は、いずれか一つを選択せよ。

- | | | | | | |
|---|-----|----------|----------|-----------|---------|
| ① | サク誤 | A 善後サク | B サツ覚する | C サク除する | D 一サク日 |
| ② | 氾濫 | A はんらん | B はんかん | C ほんらん | D ほんかん |
| ③ | キ模 | A キ発油 | B 物を廃キする | C 天明のキ饅 | D 交通法キ |
| ④ | 崩カイ | A 感ガイに浸る | B 胃カイ瘍 | C 家が全カイする | D 後カイする |

問二 空欄

a

d

に入る語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選んで、その符号をマ

ークせよ。解答番号は 5。

- A a また b だから c そして d たとえば
B a また b たとえば c そして d だから
C a そして b たとえば c また d だから
D a そして b だから c たとえば d また

問三 傍線「やや撞着した振舞いだ」と言えないこともない」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次の中から一つ選

び、その符号をマークせよ。解答番号は 6。

- A 作者の概念を稀薄にする「イメージ」について語ろうとしながらも、有名な芸術家の名前を挙げてしまったから。
B 作者の概念を形成する「イメージ」について語ろうとして、偉大な芸術家の名前を繰り返し挙げてしまったから。
C 「二八八〇年代」以前の「イメージ」について語ろうとしながらも、実存主義的な芸術家を挙げてしまったから。
D 「二八八〇年代」以前の「芸術」を「群衆」のなかで考えようとして、特権的な芸術家の名前を挙げてしまったから。

問四 傍線2「距離を無化する」「イメージ」の体験」とはどのようなものか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 7。

A 西欧諸国では、建設途中のエッフェル塔が絵入り新聞によって多くの人々に認識されてはいたものの、遠近感がつかめなかつたので、人々はなかなか「イメージ」ができなかつたという体験。

B 西欧諸国では絵入り新聞に建設途中のエッフェル塔の画像が掲載されたおかげで、多くの人々が塔に昇りたいという欲望をかきたてられ、その興奮を「イメージ」したという体験。

C フランスのパリでも地方でも西欧諸国でも、建設途中のエッフェル塔の画像が絵入り新聞で行き渡り、距離に関係なく、多くの人々が「イメージ」を共有したという体験。

D 建設途中のエッフェル塔の画像が絵入り新聞に掲載され、まずは画像という「イメージ」が地球の裏側まで伝わっていったことにより、多くの人々の期待をふくらませていったという体験。

問五 空欄 1 にはどちらにも同じ語句が入る。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解

答番号は 8。

A 高さと低さ

B 現実と仮想

C 遠さと近さ

D 直線と曲線

問六 空欄

2

に入る四字熟語を前後の文脈を考えて最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

よ。解答番号は 9。

A 荒唐無稽

B 一期一会

C 千載一遇

D 前代未聞

問七 傍線3「再現可能性は人を上の空にするのだ」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 10。

A 決定的に重要な瞬間も繰り返し再生可能なために、われわれはそれらを何度も見ているうちに飽きてしまう。

B 決定的に重要な瞬間も繰り返し再生可能なために、われわれはそれらをたいしたものではないとみくびるようになる。

C 決定的に重要な瞬間を何度も繰り返し見ているうちに、われわれはテクノロジーの進歩に気がつくようになる。

D 決定的に重要な瞬間を何度も繰り返し見ているうちに、われわれは映像文化の価値を磨耗していくことになる。

問八 傍線4「過激化の一途を辿っている」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **11**。

- A われわれは「再現性」に正確さを求めるようになったので、今後「イメージ」の劣化を防ぐ技術が高まっていく。
- B デジタル化されたデータはいくら再現しても劣化することがないので、今後は「イメージ」の再生頻度が高まっていく。
- C デジタル化されたデータは劣化することがないので、今後も同一の「イメージ」を再現する正確さはさらに向上していく。
- D われわれは「再現性」に慣れてしまったので、今後は「イメージ」の内容の激しさが増していく。

問九 傍線5「アウラの消滅」の後、それに取って代わって出現するものが「等距離性」と「再現性」なのである」とあるが、どういふことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **12**。

- A ベンヤミンが豊かなコノテーションとして指摘したのは、「イメージ」が発信され受信される過程において、様々な反応を吸収することで、「群衆」が成立していくという事態である。
- B 「近代」的な「蜃集空間」は、複製技術の誕生以後において大幅に変化し、人々は距離や時間に関係なく、特権的な固有名によって再編成される「イメージ」を共有していくようになった。
- C エレクトロニクス技術の劇的な発展によって、コミュニケーションは「同時性」と「遍在性」を強調していくことになり、ひいては人々のコミュニケーションの密度を稀薄化していくことになった。
- D 一回限りの輝かしい神聖な瞬間が、テクノロジーの発達により消失し、そのかわりに複製技術によって距離に関係なく同一の「イメージ」を再現することが可能となり、本物という概念は薄れていった。

(二) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

敬愛する養老孟司先生は自称するところの「虫屋」であり、おもに東南アジアをフィールドにして虫を追っておられる。先般、お会いしたときも、ラオス、タイなどで二週間ほど「虫取りツアー」をされた直後で、話題はしばらく虫をめぐる転々とした。

そのときに、養老先生がアメリカのテレビメディアから「どうして日本人はこんなに虫好きなのか？」という取材を受けたという話を伺った。そういう質問が出ることは、欧米には本邦における「虫屋」に相当するものが存在しないか、あるいはごく少数が社会の片隅に逼塞ひっさくしているということである(日本には『月刊むし』という定期刊行物があるが、虫好きのための商業誌が存在しうるのは世界的にも例外的な事例に属するらしい)。(a)

なぜ日本人はそれほどに虫が好きなのか。

その理由に養老先生はびちゃびちゃした湿気の中で節度なく生物種が繁殖する温帯モンスーン地域特有の「生物学的多様性」を挙げられた。環境的条件が多様であれば、生存戦略上、種も多様化する。色違い型違いの似た虫がごちゃごちゃいると、虫好きたちの分類の血が騒ぐのである。(b)

そこから話題は転じて、その「多様性への愛着」はまたわれわれの宗教的な特殊性にも通じるのではないかという話になった。(c)

一 神教が生まれたのはエジプト、パレスチナ、アラビアという中近東のかなり狭いエリアに集中しているが、ここは環境的多様性においては、世界でもきわだって単調な場所である。気象地形植生に変化がなければ、生物種の方にもことさらに多様化してみせる義理がない。この生物種の変化の少なさと、神性の単一性(あるいは「神性の首尾一貫性」)の間にはおそらく何らかの関係がある。(d)

仏教には釈迦という焦点的な神格が存在するが、実際に寺院に行けばわかるとおり、「ご本尊」というのは単一の神格ではない。善男善女たちはあちらでは大日如来を拝み、こちらでは千手観音に詣でる。それはおそらく私たち日本人が神格の多様性を、信仰の揺らぎとしてではなく、むしろ神性の豊穡さとして受け止めているからであろう。

どうしてそんなことを急に思い出したかという、今バリ島で休日を通り過ぎていくからである。

着いた日から三日続けて

ア

を流したような豪雨が降り続けている。木々はむせ返るような温気と天来の慈雨を受けて節度なく増殖し、虫も鳥も獣も繁殖することの喜びに身もだえしている。そんな生命の震えを私はこの熱帯の空気のうち感じ取る。そして、いつそ小気味よいほどに休みなく降り続ける雨を眺めながら、この「イ」がもしかすると「アジア的」ということの本質なのではないかと思う。

インドネシアはイスラム教だが、バリはポリネシアの宗教儀礼がまざりこんだヒンドゥー教圏であり、ここは島内に数千の寺院がある。そのせいで、バリは「神々の島」とも呼ばれている。

¹ どういうわけだか私はバリに来ると異常に眠りが深くなる。これで三度目のバリだが、いつもほとんどどこにも出かけずに、ひたすらホテルのベッドかプールサイドで眠り続けている。

横になっているという状態が私にとっては、いちばん「バリの」な姿勢なのである。

旅先で枕が替わつてうまく寝付けないということがたまにあるが、バリではそういうことは起こらない。ベッドに入ると同時にいきなり深い眠りの淵に引きずり込まれる。寝ている間に ウ したらしく、天地が逆になり、全身の筋肉が弛緩し切った状態で心地よく目が覚める。

同行の人々に訊くと、やはり口々にいつになく眠りが深いと言う。

それはおそらくこの島には「靈的に呪鎮が効いている」からだろうと私は思っている。

「呪鎮が効いている」というのは強大な神がその地を専一的に支配しているせいで、悪鬼や悪霊が放逐されて「清浄」が達成されているということではない。むしろ、善神悪神魑魅魍魎ちみもうりょうが節度なく繁殖し、それらが輻輳くわくそうして、ある種のナチュラルな整序が達成されている状態を言うのではないであろうか。「靈的な交響楽」に身を預けて、その律動とともに震動しているというのがバリの大地に横臥しているときの私の身体的実感である。

節度のない靈的豊穡とそれがもたらす自然発生的な秩序の感覚、これはおそらく一神教の文明においては「バガニスム」(異教)

と呼ばれて、厳しく排斥されてきたものだろう。

けれども、私たちアジア人にとっては、この異教性の方がだいぶ親しみ深い。

一 神教における典型的な霊的体験は「天なる父」の単一の視座からすべての時間とすべての空間が一望的に「鳥」瞰されるような、しんとした斉一的なヴィジョンのことである。私たちアジア人にとっての霊的体験は、それよりはむしろ、無限の時間と無限の空間の中に投じられた一匹の「虫」が、自分がどこにいいのか、いつの時代を生きているのかも知らず、そんなことはてんで意に介さず、短い生を営巣と捕食と生殖のためにさわがしく過ごしている状態のことを言うのではないか。

私はバリにいと気楽な「虫」になったような気がするのである。

バリと似た感じを東京の定宿である学士会館でも経験する。関西に在住しているせいで、上京するときにはホテルに泊まる。これまでいろいろなホテルを試してみたけれど、眠りの深さでは学士会館に及ぶところがない。

学士会館は皇居の平川門の東、築城的には大手門のすぐ外側であるから、風水的にはほぼベストのロケーションのはずである。この「ベスト」の所以はすぐ近くに平将門の首塚があることに関係があるのではないかと私は思っている。「新皇」と自ら称して宮廷に弓を引いた、日本史上もつとも高名な「まつろわぬもの」を鎮めた墓所と隣り合わせのところに、パレスホテルや帝国ホテルといったホテルが林立しているのはおそらく偶然ではない。

私たちにとって霊的に気分のよい場所というのは、エ「が達成されているところではない。私は試みたことがないが、教会の祭壇の中や、寺院の本尊の下で眠るといいうのは、常人にはかなり困難なことではないかと思う（そういうことができるのは阿Qとか椿三十郎とか、例外的に精神がタフな人物に限られるであろう）。そのような場所はおそらく清浄すぎて、かえって気持ちが悪まらないのではないかと思う。

霊的に清浄すぎる場所、霊的に無音の場所は私たちにはいささか息苦しい。私たち人間は、その不完全性ゆえに、むしろある種の「汚れ」とともにあるときにこそ、おそらくは安らぎを覚えるのである。

私たちは清浄と穢れ、繁殖と枯渇、善と悪、生と死の織りなす、終わりのない対話を感知する。だから、対話が気分よく運ん

でいる場所にいと安らぎを覚え、バランスの悪いところにいると、不安になる。私たちは無意識的にこのかすかなバランス感を手がかりにして自分の働くべき場所、安らぐべき場所を選んでいる。

もちろん、そのようなものを感じない人もいるし、感じるはずもないと主張する人もいる。そういう人たちはもっぱら外形的・数値的なデータに基づいて、自分のいるべき場所を選択する。

どちらがよいとかどちらが幸福であるとかいうことは誰にも言えない(場所以外の他の条件をすべて同じにして、同一人物の心身の変化を長期的にモニターすることでは「場の力」を定量的に示すことはできないからである)。

私がこういうことを言うと、顔をしかめて「大学教師ともあろうものが、非科学的なことを口にするな」と叱責する人がいる。それによって私はいくばくかの社会的信用を失っているのかもしれない。だが、私自身は「この場所は気分がいい」この場所は「気分が悪い」という身体的直感を手がかりに現に半世紀余り生きながらえてきたのである。いくら叱られても、いまさらそのやり方を改めることはできそうもない。

同行の人々はこれから島内の寺院めぐりに行くそうである。私は一人ホテルに残って、この原稿を書き上げたら、プールサイドでカクテルを飲んで昼寝をする予定である。横臥して、厚手のタオル越しにバリ島の大地のゆるやかな律動を半睡状態で聴き取るのは、私にとって至福の時間の一つである。

(内田樹の文章による)

問一 空欄 に当てはまる語として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

13。

A 巻軸

B 機軸

C 車軸

D 掛軸

問二 空欄 に当てはまる表現として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

14。

A 専一的な支配

B むせ返るような温気

C 節度のなさ

D 身もだえ

問三 空欄 に当てはまる表現として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

15。

A 輾転反側

B 七転八倒

C 換骨奪胎

D 暗中摸索

問四 空欄

エ

に当てはまる表現として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

16。

- A 霊的な交響
- B 穢れの空間
- C 完全な清浄
- D 呪鎮の効果

問五 傍線1「どういうわけだか私はバリに來ると異常に眠りが深くなる。」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中

から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

17。

- A 休みなく雨が降ったり虫たちが繁殖したり、霊的豊穰さがある種のナチュラルな整序を与えているから。
- B 霊的に清浄すぎたり寒くなったりすることが少なく、虫屋になったような解放感を与えてくれるから。
- C 数千の寺院のある神々の島であり、そこから天なる母の霊的な交響樂が感じられ厳格になれるから。
- D 温帯モンスーン特有の多様な衣食住の環境が、日本にいるときとよく似ているために安心感があるから。

問六 傍線2「この場所は気分がいい」とあるが、「私たち」にとってそれはどのような場所か。最も適切なものを次の中から一つ

選び、その符号をマークせよ。解答番号は

18。

- A 豊かな環境のもとで、常人には感知できない生物的な多様性が育まれた混沌とした場所。
- B 生きとし生けるものを超越した強大な力により、霊的に清浄で安寧な状態が徹底して保たれた場所。
- C ロケーションがよく、仕事から解放されてのんびりと休日のひとつを満喫することができる場所。
- D 多種多様なものたちがそれぞれ存在し際限なく関係し合いながらも、均衡を保ち自然な秩序をもった場所。

問七 右の文章には、次の一文が脱落している。どこに入るのが最も適切か。本文中の(a)～(d)の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **19**。

【脱落文】 アメリカ人はそれで納得したらしい。

- A (a)
- B (b)
- C (c)
- D (d)

問八 本文のタイトルとして最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **20**。

- A 楽園としてのバリ
- B アジア的宗教性
- C 一神教と環境的画一性
- D 日本的虫屋と温帯モンスーン

(三) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

* 東宮におはしましける時、中納言¹匡房²まだ下臈に侍りけるに、世を恨みて、「山の中に入りて、世にも交らじ」など申しければ、経任と聞えし中納言の、「われはやむごとくなるべき人なり。しかあらば、世のため身のためくちをしかるべし」と諫めければ、* 宇治の太政大臣心得ず思ほしたりけれど、東宮に参り給ひければ、宮も喜ばせ給ひて、やがて殿上して人の装^{まぶ}など借りてぞ、簡^{かた}にもつきける。さて夜昼文³の道の御友にてなむ侍りける。位に即かせ給ふ初めに、つかさもなくて五位の藏人になりたりければ、藏人の式部大夫とてなむ、空きたるに従ひて中務の少輔にぞなり侍りける。

大式実政は、東宮の御時の学士にて侍りしを、時なくおはしませば、かまへて参り寄らぬ事にならむと思ひけるに、さすが痛はしくて、甲斐守に侍りければ、かの国より上りて参るまじき心構へしけるに、下りける餞せさせ給ふとて、

く⁴の民たとひ甘棠⁴の詠をなすとも、忘るる事なかれ多くの年の風月の遊^{あそび}

と作らせ給へりけるになむ、

ア

忘れ参らせざりける。甘棠の詠とは、唐国に国司なりける人の宿れりける所に、

山梨の木が生ひたりけるを、その人の都へ返り上りて後、政事うるはしく、しのばしかりければ、この梨の木伐ることなかれ、かの人の宿れりし所なりといふ歌をうたひけるになむ。さて親王^{みま}位に即かせ給ひて後に、「左中弁に加へさせ給へ」と申しければ、「露ばかりも

イ

も思すまじきに、いかでかかすることは申すぞ。正左中弁に初めてならむ事あるまじき由、仰せ

られければ、藏人頭にて中納言資仲侍りける、重ねて申しけるは、「実政申すことなむ侍る。木津の渡^{わた}の事を、一日にても思ひ知り侍らむ」と奏しければ、その折覚ししづめさせ給ひて、計らはせ給ふ御気色なりける。昔実政は春宮の春日の使に罷り下りけり。隆方は弁^{*}にて罷りけるに、実政まづ船など設けて渡らむとしけるを、隆方押し妨げて、「待ちさいはひする者、何に急ぐぞ」など、ないがしろに申し侍りければ、辛く思ひて、かくなむと申したりけるを、思し出^{おも}だして、この事ばかり天照る御神に申しうけむとて、左中弁には加へさせ給ひてけり。

(『今鏡』による)

注

* 東宮……後の後三条天皇。

* 下臈……官位の下級な者。

* 宇治の太政大臣……藤原頼通。

* 簡にもつきける……昇殿を許される者の簡に名が記された。

* 親王……東宮に同じく、後三条天皇。

* 春日の使……奈良の春日大社に派遣される勅使。

* 弁にて……弁官として。

問一 傍線「匡房」の談話を記録した説話集として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

21。

A 江談抄

B 今昔物語集

C 宇治拾遺物語

D 沙石集

問二 傍線2「やむことなかるべき人なり」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **22**。

- A やむを得ない事情を抱えているはずの人だ
- B 格別の評価をうけていないであろう人だ
- C いまだ高貴な身分ではない人だ
- D 出世するにちがいない人だ

問三 傍線3「文の道の御友」とは、誰と誰との関係をいうか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **23**。

- A 匡房と経任
- B 東宮と匡房
- C 経任と宇治の太政大臣
- D 東宮と宇治の太政大臣

問四 傍線4「甘棠の詠」の意味するところを説明するものとして最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **24**。

- A 領主が都に帰還した後後に領土が荒廃したことを領民が嘆くもの
- B 善政を施した領主が都に帰還した後も領民が領主を慕うもの
- C 日本と唐の国との国司のちがいを示すもの
- D 領主の愛した山梨の木を切らないように哀願するもの

問五 空欄 に入れるべき語として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

。

A よも

B な

C けだし

D え

問六 空欄 に入れるべき語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

。

A 実りなく

B 本意ならぬ

C 理なく

D 身に合はざる

問七 本文の内容に合致しないものとして最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 。

A 匡房は身分の低いころに俗世を離れることを考えていたが、経任に諫められることで思いとどまった。

B 匡房は東宮が天皇に即位した後、ふさわしい官職になかったが、欠員が生じた中務の少輔となった。

C 実政は甲斐守となつて赴任するとき、東宮が不遇であることから、甲斐から都には帰らないと考えていた。

D 隆方は受けた屈辱を東宮に奏上し、即位した天皇はこのときのことを思い出して隆方を左中弁に任じた。